

クローズアップ

NGO・NPO

特定非常利活動法人

中国の眼科医療を支援する会 ～年1回の海外ボランティア できる範囲で無理なく～

Close Up

NGO・NPO



↑遼寧省瀋陽市の中国医科大学。硝子体手術の様を同時中継ビデオで学習

二〇〇三年三月、静岡県内の眼科医らを中心に組織する「中国の眼科医療を支援する会」はNPO法人の認証を受けた。現在、会員は三五人。収入は会費と寄付のみである。一〇年ほど前から、毎年一回、五月の連休など長期の休暇を利用して、日中眼科技術交流団を派遣し、中国の眼科技術向上に寄与してきた。NPO法人としての初めての活動となった昨年一月二〇日から二四日の日中眼科技術交流団（遼寧省瀋陽市）、日中眼科技術交流事前調査団（浙江省麗水市）の二つのチームの派遣報告を通じて、活動内容を伝えたい。

日中眼科技術交流団

交流団の派遣は、中国医科大学眼科学の劉哲麗教授らの招きで実現した。当会からは、

邱信男理事長（きゅう眼科医院院長、静岡市）、沼津市立病院の矢田清身眼科部長、浜松医科大学眼科学の邱慧講師ら七人が参加。外部講師として元名古屋大学助教授の安藤文隆さんら二人も加わり、総勢九人が参加した。

中国医科大学付属第一病院では、網膜硝子体の公開手術のほか、「糖尿病網膜症失明の防止と対策」などをテーマに講演した。硝子体手術は、硝子体出血や網膜剥離で低下した視力を回復させる。眼球内に照明用ファイバー、硝子体器具などを差し込み、手術用顕微鏡を覗きながら行う非常に繊細な手術で、一〇年ほど前に日本で始まり、中国ではようやく緒についたばかり。医療機械は整備されたが、個人の技術が追い付いていない。中国でも日本と同様に食事の西洋化が進み、糖尿病患者の増加による糖尿病網膜症が急増しており、失明する患者が増えている。

遼寧省のほか、吉林省、黒竜江省の東北三省の硝子体手術を専門にする中国人眼科医ら約一五〇人が「中日硝子体手術セミナー」に参加した。北京大学眼科センター、北京大学人民病院の医師らも講師として招き、日中双方での意見交換なども行われた。中国側の要請により、中国医科大学付属第四病院でも網膜硝子体の公開手術を行った。手術後の質疑応答も活発で、討論が終わった後も個人的な質問が続いた。

当初は、NPOが発足したばかりの五月に交流団を派遣する予定だった。しかし、新型肺炎（SARS）の大騒ぎで延期を余儀なくさ

(特活) 中国の眼科医療を支援する会

〒420-0041 静岡県静岡市双葉町2番8-501号

TEL&FAX 054-271-6663

れ、SARSが終息した後、中国側の強い要望であらためて訪問となった。

活動の見直し

交流団の派遣延期が決定した後、当会の活動を見直すこととなった。これまで、中国の大学などの公的機関からの要請に基づき、大学付属病院で先進的な技術供与を行ってきた。また、一〇年前は白内障手術が中心だったが、中国側が求めるレベルは非常に高くなっており、会員だけでは対応できず、外部講師を依頼せざるを得ない状況となっている。外部講師への謝礼はなく、旅費のみを当会が支給している。

このような状況の中で、「高度な専門技術を有する眼科医らが、多忙な時間を割いてボランティア活動に参加するのだから、それぞれの専門技術を生かす方が望ましい」という意見が出てきた。また、SARSの終息後、再び中国側から派遣要請があったことから、次年度以降は、NPOとして草の根的な活動を行うことを決めた。

日中眼科技術交流事前調査団

中国の失明者は八〇〇万人以上と言われ、発展の遅れている内陸部での失明者は増加傾向にある。

そこで、静岡県知事の認証を受けたNPOとして、静岡県と姉妹都市提携をしている浙江省の中から活動地域を探すこととした。麗水市青田県は、華僑を数多く輩出している地

域で、邱理事長や王貞治ダイエー監督の父親らの故郷でもある。九割以上が山林で平地が少なく、多くの人が華僑に出て行かなければならない貧しい地域。しかし、日本ではこれ以上の情報が得られないため、青田県のお眼科医療事情の調査を行うことにした。当会の岡和田紀昭医師(松江市で開業、中国から帰化した看護師の長里敏子さんと私(事務局長の小林一哉)の三人が調査に入った。上海から高速道路をノンストップで六時間以上かけて麗水市に入る。そこから青田県までは悪路を三時間。青田石の産地で著名だが、日本人観光客らは皆無だ。

青田県のお眼科事情は、五〇万人の人口に対し、眼科医がいる病院が人民病院のみ。それ



↑青田県にある人民病院の眼科手術室。本年度から長期の交流事業に取り組む予定

も三〇歳、三三歳の経験の浅い男性医師二人だけで、医療器具は古く、数も不足している。一日の外来は三〇から五〇人で、一年間の手術件数は一〇〇例前後。白内障患者は二万人前後おり、手術を必要としている患者は毎月約三〇〇人増えている。「日本からの支援が至急必要だ」という人民政府の言葉に嘘はない。北京、上海の目を見張る発展、有人人工衛星の打ち上げなど華やかな中国とは別の暗い影の部分が、中国には数多くある。

今後の活動

事前調査団の報告を基に、青田県へ日中眼科技術交流団の派遣を協議している。また、手術用顕微鏡、角膜内皮細胞顕微鏡、眼底力メラ、細隙灯顕微鏡、両眼視鏡、超音波手術装置の寄付を募り、それらを無償貸与する準備も進めているが、機械類のオーバーホールから、精密機械としての嚴重梱包、搬送、税関手続きをどのように行つかなど課題が多い。

ある地域と強いきずなを結ぶことができるような友好関係を築いていくことも重要なボランティアだと考える。毎年数日間のボランティアだから限界もある。しかし、それだけに無理なくやることができるといえる。眼科医という立場は、それぞれ地域での社会的な役割も大きいし、時間的な余裕も少ない。それにもかかわらず、年一回の連休で海外ボランティアに取り組むという新たな過ごし方に多くの会員は満足している。

クローズアップ

NGO・NPO

ボランティア団体

しまね多文化共生ネットワーク ～「外国人」「日本人」の枠を超え、 日常のお付き合いを通して交流の輪を!～

Close Up

NGO・NPO

設立の経緯

当団体は、二〇〇二年八月に、在住外国人の支援を目的として松江市を中心に活動を始めた。現在、事務局ではEメールを利用して情報発信を行っており、約八〇名のメンバーがその情報を受け取っている。このほかにも、インターネットのホームページや日常のお付き合い、勉強会などを通して情報交換を行っている。



↑2003年3月16日 しまね多文化共生ネットワーク設立の集い

活動の目的

自分の国を愛し、自分の言葉に誇りを持つ気持ちは誰でも同じである。当団体は、普段からの自然なお付き合いを通して、お互いを理解し合い、尊重し合える友だちの輪を広げ、活動を目的としている。

医療専門用語の勉強会、知識を習得するための各種教室、日常の問題を共に解決するための生活相談、みんなと気楽に話せる持ち寄りパーティーなど、さまざまな場面を通して交流を深め、いざという時に助け合える仲間をつくることを目指している。

活動内容

○ 医療専門用語勉強会

昨年、松江市在住の外国人を対象として、「日本の医療機関をどの程度利用しているか」、「医療に関してどのような問題を抱えているか」などについてのアンケート調査を実施した。その結果、多くの外国人から以下のような意見が挙がり、多少なりとも通訳の介在を必要としている実態が明らかになった。

- ・病状を正確に伝えたい
- ・医師からの説明を正確に把握したい
- ・薬の飲み方が分からない

通訳に対する期待と同時に、「医療用語が理解できるほどの英語力がある通訳がいるのか」、「通訳を介した場合、プライバシーが守られるかどうか心配だ」などの意見もあった。そこで、毎月一回勉強会を開催して、医療に関する最低限の用語や表現、患者や通訳のプライバシーに関する問題、さらには通訳として知っておかなければならない基本的知識などについて学んでいる。また、勉強会では、具体的な診療場面をシミュレーションしながら通訳の練習をしたり、既に発行されている資料を参考にしたりしながら、実際の通訳の現場に必要な情報を集めている。

○ 日本語教室

普段の生活において、在住している国の言葉と話せることが、より快適な毎日を過ごす要件であることは誰もが疑うものではない。そこで、在住外国人が周囲の人たちと「ミニ

しまね多文化共生ネットワーク

〒690-2101 島根県八束郡八雲村日吉282-27

E-mail:smn@tx.miracle.ne.jp URL:http://fish.miracle.ne.jp/smn/

二ヶーションを取ったり、必要な情報を自ら収集したりすることができるようになることを目標として、毎週一回日本語教室を無料で実施している。この教室は、ただ単に日本語の習得のみを目的としているのではなく、日中自宅で一人寂しく過ごしている女性たちに外出の機会を提供し、リフレッシュできる時間を共に過ごすこともねらいの一つとしている。

さらに、日本語教室で在住外国人の日本語習得をサポートしているメンバーが、それまで遠いところを感じていた外国を、より身近に感じることができるようになっていることから、相互理解を深める大きな役割も担っている。

○パッチワーク教室

テキストを見ながら日本語の習得を目指す日本語教室とは違い、手芸をしながら日本語を覚えたり、情報交換したりしているのがこのパッチワーク教室である。一針一針布をつなげていくように、メンバーの心をつなげている。

○生活相談

日本の生活に慣れている在住外国人にとっては些細なことであっても、文化や習慣の違いから悩み戸惑う在住外国人も少なくない。また、急病などの緊急時に相談できる場所があるというだけでも、日々安心して暮らしていくことができる。そこで、当団体では、在住外国人のメンバーを対象とした二四時間対応の緊急電話サービスを実施している。このような、普段から気軽に相談に応じる環境

を整えておくことによつて、水道、電気、固定電話や携帯電話の契約に関する質問や、洗濯機などの電化製品の故障、引越しの際の荷物の運搬など、日常のちょっとした相談事を、友だちとして一緒に解決することができるようになることを目指している。

また、異国の地での妊娠、出産、子育ては、当事者でしか分からない恐れや不安がある。そんな時に、出産を経験している先輩ママさんたちが親身になって相談のつてくれたらこんな心強いことはない。時には役所や病院へ同行し、時には家でお茶を楽しみつつ出産や育児のアドバイスをすることで、女性たちの精神的支援もしている。

○その他

これまで紹介した活動のほかにも、いくつかのイベントも実施してきた。その中でも特に好評を得たのが農村での農業体験である。松江市の南に位置する八束郡八雲村の農家へお願いして、荒おこしから稲刈りまでの稲作体験や、畑作、シイタケ菌の植え付けを体験させていただいた。都会出身の人や、日本とは全く違う気候の国から来た人々には新鮮な体験ばかりだったようで、この様子をビデオに録画して自分たちの国で紹介したいという声もあつた。受入れをしてくださった農家のみなさんも、共に汗を流すことで、体験に参加した在住外国人たちに親しみを感じ、さらには彼らの国の習慣や言葉を覚えたいとおっしゃるほどであった。パーティーだけでは味わえない心地よさがあつた。



↑農業体験（稲作 荒おこし）

今後の抱負

私たちが住む地域には「異文化」ではなく「多文化」が存在している。一人一人にとつてさらに住みよいまちになるよう、(財)しまね国際センターをはじめとする公的機関と連携を取りながら情報の共有を図っていきたいと考えている。

これまで多かれ少なかれ存在してきた「外国人」「日本人」という枠を超えて、日常の付き合いを通して交流の輪が広がるように活動を続けていきたい。